

---

# たたた侍

勝田圭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たたた侍

### 【著者名】

勝田圭

### 【ノード】

N 7 3 7 4 V

### 【あらすじ】

いつからだろう。僕の家に、知らない何者が住み着くようになったのは。それは決して僕に姿を見せない。むこうさんも別に姿を隠すつもりはないのかも知れない。でもとにかく、一瞬で通り過ぎてしまうものだから、姿を確かめようがないのだ。僕が気付いた瞬間には、もうドアの向こうを左から右へと通り過ぎてしまっているのだから。

ふと、何かの気配を感じた。

何がが、僕の背後をすつと横切つた気がする。

いや、気がするじやない。間違いなく、横切つた。  
今日始まつたことではない。

いつからだろう。

僕の家に、知らない何者かが住み着くよつになつたのは。  
それは決して僕に姿を見せない。

むこつさんも別に姿を隠すつもりはないかも知れない。でもと  
にかく、一瞬で通り過ぎてしまつものだから、姿を確かめようがな  
いのだ。僕が気付いた瞬間には、もうドアの向こうを左から右へと  
通り過ぎてしまつてゐるのだから。

ドアの向こう……そう、分かつたことがある。そいつは、僕がこ  
の自分の部屋について、ドアを開けている時に限つて現れる。  
生きてこゝるといつのならば、存在しているといつのならば、それ  
以外の時だつて存在していいるのだろうが、少なくとも僕が気配を感  
じたことはない。

多分、人間だ。

いや、断言は出来ないけど、以前にちらりと、踵を見たことがあ  
る。袴姿のようだつた。

僕は椅子に座り、じつとドアの向こうを見た。

実は出現ポイントさえ分かつてしまえば、チラチラ引っ切りなし  
に現れているのではないか。そう思つたからだ。

五分、十分、時間が経つたが、それは現れなかつた。

散らかつた部屋の埃っぽさに、くしゃみをした瞬間であった。

ひゅつ

通つた。

くしゃみで一瞬目を閉じてしまつたが、しかし、はつきりと見た。

侍というのか、お奉行さんというのか、とにかく袴を着た、ちょっとまげ武士だ。

また僕は頑張つてみたが、五分、十分、十五分、現れる気配がない。

もしかしたら。

僕は、わざとくしゃみをしてみた。

たたつ

通つた。

出現条件が分かつた。

理屈は不明だが、とにかく、この部屋のドアを開けた状態で、僕がこの部屋でくしゃみをすると、現れるのだ。現れるといつても、左から右へ一瞬で通り過ぎるだけだが。

確信を得るため、もう一度、くしゃみをしてみた。

たたつ

駆け抜けた。

間違いない。

この武士のような男 とつあえず侍としておこう 侍は、何故くしゃみで姿を現すのだろうか。

光の加減やら体調やらで何だかキラキラ光るものが見えることがあるが、もしかしたら単にそういうものなのだろうか。それと、僕の脳の動きの何かとが混ざり合つて、あのようなものが見えるのだろうか。

僕は部屋を出た。念のため、きょろきょろ見回してみたが、どこの侍はいない。そこでくしゃみをしてみたが、現れなかつた。やはり、あの部屋の中ないと呼べないようだ。

山田の家に電話をかけた。すぐ近くに住む友人だ。

自分にだけ見えるものなのかどうか確かめようと思つたからだ。程なくして山田がやつてきた。早速、僕の部屋へ入れた。

僕は山田に手短に事情を説明した上で、くしゃみをしてみせた。たたたたつ。

侍が駆け抜けた。

山田にも、その姿が見えたそうである。  
ということは、少なくとも僕の幻覚ではないということだ。  
そうすると、これはなんなのだろうか。

靈的なもの？

もつと物質的なエネルギー？

僕はもう一度呼んでみた。

ひゅつ

山田は手を叩いてよろこんだ。

実験することになった。山田の提案で、侍の通り道に小さな物を置いてくしゃみをしてみたところ、侍はタツと現れガツと蹴つまづいた。バランスを立て直すと、そのまま何もなかつたかのように通り過ぎた。心なしか顔が赤くなっているような気がしたが。

山田もくしゃみをしてみた。

ひゅつ

通り過ぎた。

僕だけが呼べるわけではないうだ。

山田が面白がって何度もやってくるうつ、ある法則性に気が付いた。ふえーーーっく、しょおおおい、みにゅうくらくしゃみをすると侍はゅうくり通り過ぎ、クシと素早くやると物凄い速度で通り過ぎるのだ。

通り過ぎる瞬間、山田が物を投げ付けたら、ボクシングのパーティングディフェンスのよつにパシッとはたき落とされた。

通り過ぎる瞬間、山田が今度は工口本を投げたら、パシッヒ受け取り、そのまま駆け抜けた。

山田が調子に乗ってあまりに何度も何度も呼び出すものだから、侍は多少息が上がってきたようだ。

山田が何度も障害物を置いて転ばせるものだから、だんだん、腕や顔などに擦り傷が出来てきいた。

僕はちょっと可哀相に思い、絆創膏を置いてやった。

くしゃみで呼び出すと、ひゅんと現れ、絆創膏を拾い、凄まじい速度でべたべたと貼り付け、駆け抜けて行つた。

彼は一体どこから来てどこへ行くのだろう。

右に駆け抜けるのに、すぐ呼んでも左から現れるのは何故だろう。ゆつくづくしゃみをし、たつたつとゆつくり通り過ぎて行く侍の首に、山田はパイナップルの空き缶をぶら下げた紐をかけた。

姿を消した瞬間に、またすぐにくしゃみで呼んだが、いま首にかけたばかりの空き缶がない。

僕と山田は部屋を出て探したが、どこにもその缶は見つからなかつた。

侍はどこから来て、どこへ消えるのか。僕たちは想像した。

山田は良い考えがある、と僕のデジカメをいじり出した。デジカメに長い長いビデオケーブルを繋ぎ、ビデオデッキに接続。ビデオデッキの録画をオンになると、くしゃみで侍を呼んだ。

さつきの缶の容量で、山田はデジカメをぶら下げた紐を侍の首にかけた。

ぎー————。

テレビに映つていたデジカメの映像が消え、砂の嵐になった。部屋を出でみると、デジカメから引っこ抜かれたビデオケーブルだがけが床にだらりと伸びていた。

カメラ、高かつたのに。

僕がくしゃみで呼ぶから、お前、抱き着いて侍をこいつに引っ張つてこい。僕は山田にそういつた。そしてそれを実行した。

山田は侍をこちらへ引っ張つてくるどころか、侍に抱き着いたまま、引っ張られて行つてしまつた。

それきり、山田は一度と戻つてくることはなかつた。といえば嘘になるか。

しばらくして、まったく予期もしなかつた形で戻つてきた。

僕が変わりのデジカメを買って、部屋の中で試し撮りとしたとき

である。

シャッターを切ったと同時に、山田がドアの前を左から右へすつと横切つたのだ。

それからしばらくは気持ち悪くてデジカメを手に取ることもなかつたのだが、好奇心から久しぶりにシャッターを切ったところ、久しぶりであつたがためかは分からぬが横切る山田の顔が、なんだか怒つているように見えた。なんだかいまにもじちらを振り向きそうに見えた。

それ以来、僕は毎日ここでシャッターを切つてゐる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7374v/>

---

たたた侍

2011年8月13日03時25分発行